

Title	意見文生成前段階における発想支援法の開発と評価
Author(s)	西森, 章子
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/69300
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏名 (西森 章子)

論文題名

意見文生成前段階における発想支援法の開発と評価

論文内容の要旨

本論文の目的は、「根拠を考える力」や「裏づけを発想する力」を促す思考支援法（トレーニング）を開発し、その結果として、「意見を組み立てる力」が青年期の学習者に形成されるのかどうかを明らかにすることであった。この目的に対して、本論文では、2章から4章までの各章において一連の研究を行った。

作文指導において、テーマについてアイデア生成すること（アイデアのリスト化(Loader, 1989)、ブレインストーミング(Vinson, 1980)）、構想すること（創構(波多野, 1973)など）、連想すること（平山, 1993など）が、その後の文章化の手がかりとなるとされてきた。しかしながら、アーギュメントや意見文の生成指導においては、どのような思考支援がありうるのかの検討は十分なされていない。その理由のひとつとして、アーギュメントの生成指導では、文の構造が優先的に指導されてきたことが挙げられる。「主題-自分の意見-理由-主題の再定義-意見」や「話題提示-自分の意見-理由-証拠-予想される反論-反論への再反論」などの構造は、学習者にとってなじみが薄いため、学習者には、まずモデルとして文構造を提示し、理解させることが重視されており(Knudson, 1991; Gleason, 1999; 小玉, 2005; 清道, 2010など)、構造内の各構成要素をどのように考えたよいか、「考え方の指導」は行われてこなかった。そこで本論文は、意見文の型（主張-根拠-裏づけ）を前提としながらも、例えば主張に対する根拠、そして根拠に対する裏づけというように、個々の構成要素が合致するように考え出す力、すなわち意見を組み立てる力を育てることを中心とした検討をおこなった。

第1章：問題の所在（研究1）

第1章では、先行研究を通して、国内外の青年期の学習者において、「書く力」や「意見を組み立てる力」の獲得状況、指導状況を見ていくなかで、「自分の意見（考え）」を書く力に焦点を絞った。そして、意見を組み立てる力の獲得の難易度やわが国の高校生の実態（研究1）から、「意見を組み立てる力」のどの部分に介入する必要があるか述べた。

第2章：根拠産出トレーニングの開発と評価（研究2，研究3）

「主張-根拠」の構造に即する形で、「根拠を考える力」を育てる教育的介入について検討したのが第2章である。具体的には、「根拠産出トレーニング」が開発され、その効果が確認された（研究2）。まず、トレーニングを受けた群において、根拠数の伸びや、根拠を考える時の視点数の増加が確認されたことから、「根拠産出トレーニング」によって根拠を多様に考える力が促進される可能性が示された。また、トレーニングを受けた学習者の振り返りから、「ある主張」を支える根拠を考えることを繰り返すなかで、どのようなトピックならば、根拠を考えやすい（考えにくい）のか、どのような時であれば、根拠を考えやすい（考えにくい）のか、自分自身の認知特性を捉えるようになった可能性（メタ認知的気づき）が示唆された。本章で提案された発想支援法によって、「根拠を考える力」がトレーニング直後のみならず、その後の新たな問題に対しても機能する可能性が示されたことから、「意見を組み立てる力」を育てる場合、本章で開発された「根拠産出トレーニング」がどの程度貢献するのか、慎重に検討する必要性が指摘された。

また、研究3では、トレーニングの構成原理と思考支援の関係について検討がなされた。その結果、トレーニングの訓練枠組みb.の「他者の考えた根拠例」の質について、根拠例の質（説得力の高さ）は、産出される根拠の数に影響しないことが示唆された。たとえ皆が「なるほど」と納得しなくても、誰もが考えるようなありふれた根拠であっても、「根拠を考える力」が促進されるということは、ブレインストーミングが促進される条件の一つ「アイデアの質ではなく、アイデアの量を強調する」(Osborn, 1953)と対応していると言えるだろう。

第3章：意見文生成前段階に根拠産出トレーニングを位置づけることの効果（研究4，研究5）

第3章では、意見文生成前段階で「根拠産出トレーニング」を経験することが、意見文をプランニングする際の思考内容（研究4）、生成された意見文（研究5）、に影響するかどうか、検討することを目的とした。

研究4では、根拠産出トレーニングを経験することで、その後意見文をプランニングする際の思考内容に変化がもたらされることが観察された。具体的には、自己の主張を支える根拠の産出数（自己根拠数）が増加するとともに、自分とは異なる主張を支える根拠の産出数（他者根拠数）も増加した。この結果は、アーギュメント構成をするときに観察される「自身の立場に反する根拠を無視または排除する傾向（マイサイドバイアスMyside bias, Wolfe et al. 2009）」とは異なっていた。「自分が賛成する立場に有利な「賛成論」だけでなく、自分に不利な「反論」についても言及することは、説得的な意見文を産出するためにも効果的である」「しかし、そのような意見文を産出することは、書き手にとって必ずしも容易なことではない」（小野田, 2015a）という指摘と照らし合わせると、「根拠産出トレーニング」によって、書き手のマイサイドバイアスが低減されるのかどうかは、今後、検討すべき課題であることが指摘された。

研究5は、「根拠産出トレーニング」を意見文生成授業の中に位置づけることによって検討がなされた。その結果、トレーニング前から後にかけて、「自身の書いた意見文」への自己評価には変化が見られた（満足度の低下）が、意見文には量的（文字数）にも、質的（根拠内容）にも、変化は確認されなかった。これより、「根拠を考える力」を促進したとしても、直接「意見を組み立てて書く力」にはつながらないことが示されたと言える。第1章のGraham & Perin(2007)のメタ分析からも、「書く力」を育てる指導法の多様性が指摘されていることから、「根拠産出トレーニング」を基にするのであれば、本トレーニングに対し、さらなる指導法（教育的介入）を追加する必要のあることが指摘された。

第4章：裏づけ発想トレーニングの開発と評価（研究6，研究7）

自分の考えを組み立てるには、主張を支える根拠（理由）や、根拠の信頼性を高める裏づけ（証拠となる事実）について、自ら考え出す力が基盤となる。この力を高めるためには、裏づけについて、数多くかつ幅広く考えるよう学習者に促す必要がある。との考えから、第4章では、「裏づけ発想トレーニング」が開発されるとともに、その効果が検討された。具体的には、「裏づけ発想トレーニング」を経験することは、裏づけを考える力（研究6）、トレーニング前後で生成される意見文（研究7）、に影響するのかが検討された。

高校2年生を対象とした実験の結果、「裏づけ発想トレーニング」を通して、裏づけを考え出す力が促進されることが明らかになった（研究6）。具体的には、トレーニングを経て、発想された裏づけの数が増加するとともに、裏づけについて考えるときの視点数も増加した。第2章の「根拠産出トレーニング」と問題形式が異なっても、「a'. 制限時間内に発想させる」、「b'. 発想後に、「他者の考えた裏づけの例」を参照させる」という訓練枠組みは、裏づけを考える力の促進にも有効と考えられた。

次に、「裏づけ発想トレーニング」を取り入れた意見文生成授業の結果、生成される意見文の内容の分析からは、「裏づけ発想トレーニング」を経験したことの影響は確認されなかった（研究7）。また、学習者のふり返りから、「裏づけ」の重要さは理解できているが、実際に「裏づけ」を考えることの難しさに言及する記述が見られたことから「裏づけ」を指導することの難しさが改めて確認された。裏づけを含めて意見を組み立てる力を育てることは、今回のような短時間の教育的介入のみでは難しかったと考えられる。従って、「意見を組み立てる力」をより確実に育てるためには、本章の「裏づけ発想トレーニング」を中心としたさらなる介入が必要と考えられる。

第5章：総合考察

本論文を構成する研究の結果からは、意見文生成前段階に「根拠産出トレーニング」や「裏づけ発想トレーニング」を導入することで、「意見を組み立てる力」が機能することが示唆された。ただし、本論文で提案する思考支援のみでは、「意見を組み立てて書く力」の獲得にまでは至らないことが明らかとなった。この後、「自分の考えを表現する力」の獲得に至るためには、自分が様々に考え出した根拠や裏づけのうち、どれが適切であるかを筋道立てて吟味する機会が不可欠となるだろう。具体的には、学習者個人が、構成要素間の論理性をチェックするような機会や、学習者どうしで、それぞれ考えた根拠や裏づけを出し合い、相互に評価するような機会が考えられる。

このような学びの展開をわが国の教育実践と対応させてみると、平成29年3月31日に告示された、新学習指導要領において重要なキーワードとなっている「主体的・対話的で深い学び」に呼応していると考えられる。本論文で開発された各種トレーニングを、学習展開のなかにどのように組み込んでいくか、丁寧にかつ精緻に検討していくことで、国語科や道徳の学習での「主体的・対話的な学び」を実現させていくことが今後可能になると考えられる。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (西 森 章 子)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	三宮 真智子
	副 査	教授	前迫 孝憲
	副 査	准教授	西森 年寿
<p>論文審査の結果の要旨</p> <p>本論文は、「自分の言いたいことをどのように文章にすればよいかわからない」「自分の意見がまとめられない」という青年期の学習者に対して、「自分の言いたいこと」を組み立てられる状態に至ることができるよう、特に「根拠」や「裏づけ」について考えるよう促す「思考支援」の面からのアプローチを示したものである。</p> <p>まず第1章では実態把握が試みられている。具体的には、国内外の青年期の学習者の「書く力」や「意見を組み立てる力」の獲得状況及び指導状況が、先行研究等から整理され、「自分の意見（考え）」を書く力に焦点が絞られた。同時に、わが国の高校生に対する実態調査（研究1）から、「意見を組み立てる力」のどの部分に介入する必要があるか、課題設定がなされている。</p> <p>第1章での課題設定に基づき、第2章では、「意見を組み立てる力」のうち「根拠を考える力」を育てる教育的介入が検討された。具体的には、研究2において、開発された「根拠産出トレーニング」を、中・高校生に実施し、その効果を確認している。また研究3では、「根拠産出トレーニング」を大学生対象に実施することを通して、トレーニングの訓練枠組みの検証がおこなわれた。これらの研究によって、開発された「根拠産出トレーニング」の有効性とトレーニングの枠組みの信頼性が確認されたと言えるだろう。</p> <p>第3章では、意見文生成の指導過程に「根拠産出トレーニング」を位置づけることで、「根拠産出トレーニング」が機能すると言えるのかどうかを検討された。その結果、「根拠産出トレーニング」を経験することは、その後の意見文をプランニングする際の思考内容（研究4）に影響するが、最終的に、生成された意見文において、明確な影響は確認されなかった（研究5）。つまり、最終的に生成される意見文の量および質を促進していくためには、「根拠産出トレーニング」だけでは十分ではなく、さらなる教育的介入を開発していく必要があることが指摘された。</p> <p>第4章では、「意見を組み立てる力」のうち「根拠に対する裏づけを考える力」を育てる教育的介入の検討がなされた。具体的には、「裏づけ発想トレーニング」が開発され、高校2年生を対象とした実験により、その効果が確認された（研究6）。また、続く研究7では、意見文生成を指導する過程に「裏づけ発想トレーニング」を位置づけ、トレーニングの効果を検討している。研究6および研究7の結果からは、「裏づけ発想トレーニング」によって、「裏づけを考える力」を促進することは可能であるが、裏づけを含めて「意見を組み立てる力」を確実に育てるためには、「裏づけ発想トレーニング」を中心としたさらなる介入が必要であることが指摘された。</p> <p>以上の7つの研究の結果をふまえ、第5章では、意見文生成にむけた教育的介入研究への意義、本論文が教育実践に与える示唆について考察したうえで、本論文の限界と今後の課題が論じられた。</p> <p>本論文は、「意見を組み立てる力」の育成に向けて、思考の流暢性や柔軟性という点から書き手を支援する方法とその有効性を示したという点で独創的であり、また思考支援によって、その後の意見文生成がどの程度影響を受けるのか、教育的介入の限界を検討しているという点で挑戦的であると評価できる。</p> <p>以上より、本論文は博士（人間科学）の学位授与に値すると判定した。</p>			